

コミュニティの概念に関する社会学的考察

富岡俊彦

はじめに

本稿は、今日の地域社会研究の主要な課題の一つであるコミュニティの概念に関して、いくつかの代表的な見解を整理することによって、その社会学的な規定を試みようとするものである。

コミュニティの研究は、アメリカ社会学を中心にして、理論と実践の両面において進められてきた。しかし、その意味内容は多岐にわたり、一義的な社会学的規定を下すことがきわめて困難であった。そこで本稿は、第一節において、これまでのコミュニティ論を系譜的に紹介している。そして、第二節では、これらのコミュニティの意味内容を整理することから、その概念化の問題に言及している。これらの検討にもとづいて、コミュニティ概念の今日的な規定を試みているの

が第三節である。

第一節 コミュニティ論の系譜

今日に至るまで、コミュニティの概念に関しては、きわめて多岐にわたる定義がなされている。本節では、これまでのコミュニティ論の系譜を追うことから、コミュニティを取り巻く様々な問題点についての検討を試みたいと思う。

その際、コミュニティ論には、一般論と現実分析理論があると考えられる。まず、その一つである一般論について見ることにする。

コミュニティの概念は、アメリカ社会学において構成されたものであるが、最初の学問的規定を行なったのは、マッキーバー(R. M. MacIver)であった。そこで、コミュニティは、アソシエーション(association)と対置する概念として規定された。すなわち、アソシエーションが「共通したあ

る一つの、あるいはいくつかの利害の集まりを追求するために組織化された集団⁽¹⁾であるのに対して、コミュニティは「地域と生活様式とを共にするという自覚をもった住民が形成する共同生活の場」⁽²⁾であると考ええる。マッキンバーによると、コミュニティとは、人間の共同生活が営まれている一定の地域であると定義される。⁽³⁾その具体例としては、開拓者村 (pioneer settlement) ・村落 (village) ・都市 (city) ・部族 (tribe) ・民族 (nation) などを挙げているが、結論としては、コミュニティの構成要件の中で、地域性 (locality) が最も重要であるとされる。つまり、コミュニティは、常に地域的領域 (territorial area) を占めるものであるとする。しかし、後期の著作の『社会 (Society) 』(一九五〇、C.H. Page との共著) においては、コミュニティ感情もその要件として挙げている。コミュニティ感情 (community sentiment) とは、充分な接触 (sufficient contacts) あるいは共通の利害 (common interests) から発生する、地域と生活様式とを共にもっているという意識性であり、換言すれば、⁽⁴⁾共属意識 (feeling of belonging together) である。

このマッキンバーの規定に関して問題であると考えられるのは、共同生活の地域的な領域がいかにして捉えられ得るのかという点である。マッキンバーは、集団の中で生活が完結していることによってコミュニティを弁別できるとしている。

すなわち、その中で人々が共通の利害によってではなく、共同生活の基礎条件を共にしていることによって生活していることが重要であり、その集団の大小は問題ではないと考える。しかし、現代社会では、交通・通信などのマス・コミュニケーションの発達により、共同生活の地域的な範囲が拡大するとともに、その境界が不明瞭になりつつある。したがって、マッキンバーによる規定では、地域性がかなりあいまいなものであると思われる。⁽⁵⁾

そして、第二の問題として、共同生活そのものが何を意味するのかという点が挙げられる。この点は、マッキンバーによると、アソシエーションとの対比の上で考えられる。つまり、アソシエーションが特定の利害追求のために組織化されるのに対し、コミュニティは、その中にいくつかのアソシエーションを含む人間生活全体にわたる共同の社会的特徴をもつ地域である。この共同生活とは、地域と生活様式とを共にしているという意識性をもつ日常生活のことであり、その社会的特徴として、社会的な類似性 (social likeness) ・共属感 (the sense of belonging together) ・共同慣習 (common tradition) などが挙げられている。ところが、現代社会においては、これらの特徴からコミュニティを規定するのが困難であるため、マッキンバーは、後期にコミュニティ感情をも

構成要件として挙げることになる。しかし、このコミュニティ感情についても、具体的・実証的に把握するのが非常に困難であると言える。

以上のように、マッキンバーのコミュニティ分析では、具体的な社会構造との関連にもとづく実証性が欠けていると思われる。けれども、一方では、コミュニティの拡大・分化がその基本的な視角の一つであり、そこから、より良い人間生活の実現が重要な問題であったと思われる。このようにマッキンバーによってコミュニティの概念が提起されて以後、コミュニティ研究はいくつかの方向から推し進められてきた。

その第一は、ギャルピン (C. J. Galpin) をはじめとするアメリカ農村社会学における生活圏などの研究である。二十世紀初頭のアメリカ農村社会は、急激な資本主義発展にともない、多くの社会問題を抱えていた。これらの問題解決のために、行政政策と強く結びついた農村研究が展開した。その中心的課題は生活圏などの設定であった。ギャルピンは、当時のアメリカ農村社会を実証的に研究することによって、様々な農村集団の変化を分析した。そして、「田舎町 (village) を中心として、その周辺の農場地域から形成される商圏・取引圏を基礎とし、それに銀行・学校・教会・新聞等のサービス圏の複合にコミュニティを指摘した」⁽⁶⁾のであった。これらのサービス圏をギャルピンは、ラーバン・コミュニティ

(rurban community) と呼んだ。⁽⁷⁾このように、当時のアメリカ農村社会学の研究では、コミュニティの基盤として、地域的な圏域性を重視し、それが明示されていたと言える。

第二には、アメリカ都市社会学における研究がある。この研究は、シカゴ学派を中心としたもので、創始者であるパーク (R. E. Park) は、生態学的意味から、競争・闘争・応化・同化という相互作用によってコミュニティを捉えた。それに對し、バージェス (E. W. Burgess) は、コミュニティを、生態的・文化的・政治的側面全体から、より広義に概念化した。そして、そこから同心円地帯理論 (theory of concentric circular zone) を展開した。さらに、マッケンジー (R. D. Mackenzie) は、コミュニティを、人々とサービスの生簾分布であると定義し、メトロポリタン・コミュニティ (metropolitan community) の体系的研究を推し進めた。また、ワース (L. Wirth) は、以前の研究に立脚し、社会組織や社会心理的な側面からも研究を行なった。

第三には、実践的な意味内容をもつコミュニティの研究がある。たとえば、地域計画におけるコミュニティ・オーガニゼーション (community organization) の理論がある。これは、資本主義社会の諸問題を解決する具体的方法論としての意味をもつものである。すなわち、コミュニティは、実践活動や計画的開発の場として、地域開発の基盤であると考え

られたのである。とくに、社会福祉事業などにおいて、このような考えが取り入れられた。

以上のように、コミュニティの概念は、一般的理論での理念型としてだけでなく、現実社会の実践的な方法論としての意味をもっている。しかし、マッキーバーの定義からもうかがえるように、コミュニティの概念はきわめて多義的である。このことは、今日の地域社会研究においても多くの問題性を残すものである。そこで、次節では、コミュニティの本質に関する体系的理論化のために、コミュニティの概念化の問題に言及したいと思う。

第二節 コミュニティの概念化の問題

コミュニティの概念の多義性は、我が国での訳語の不統一も加わって、多くの混乱と問題を生じている。しかし、今日の社会学理論において、コミュニティは重要な意味をもつものであり、その概念化という難題に関しても、積極的な検討が加えられねばならない。

このコミュニティの多義性の要因として、次のような点を指摘できる。それは、「この概念が具体的に存在する『コミュニティ』を記述するための経験的な記述概念であるか、それともそのような実在の特定の要素について構成される分析的概念であるかという、規定の前提となる方法的区別が必ずしも識別されていない」ことである。コミュニティは、日

常的用法では、都市・国家などの一定範囲の地域社会を経験的に記述する概念である。しかし、社会学理論における厳密な用法では、「その存在を経験的対応物として構成される概念もしくはモデルとして」意味されなければならない。⁽¹⁰⁾「基礎社会」や「共存社会」として訳される場合、こうした意味が含まれている。

コミュニティがこのような類概念として意味される場合は、まず多くの分析的要素が明らかにされ、それらの組み合わせにもとづいて、コミュニティの概念化がなされる。この試みの最も初期のものとして、ヒラリー(G. A. Hillery)によるコミュニティ概念の分類がある。⁽¹¹⁾その結果、コミュニティの定義のほとんどが、地域(area)・共同的紐帯(common tie)・社会的相互作用(social interaction)の三つを構成要素としていることが指摘された。しかし、これは、生態学的研究での地域的共住の強調と同様であると言える。生態学的立場では、「コミュニティの基本的過程として競争を指摘しているが、……それ自身すでに社会的相互作用の要素を含んでいる」⁽¹²⁾からである。したがって、ヒラリーによる指摘は、諸々の概念規定を、社会学の次元において要約反復したにすぎない。すなわち、コミュニティ概念の多義性という問題を根本的に解決したとは言いがたいのである。このヒラリーによる究明の後、多くの同様の試みがなされたが、それらの最

終的な帰結点は、コミュニティ概念の諸要素には、「共同性」と「地域性」の両範疇が含まれることの指摘であった。⁽¹³⁾

ところで、コミュニティにおける共同性と地域性との関連を歴史的経過の中で捉えるならば、次のように考えることができる。すなわち、前近代社会では、村落共同体に見られるように、共同性と地域性とは密接に関連しあい、一体となっていた。しかし、資本主義経済の発達とともに、両者の結合は弱化的傾向を示し始める。それは、商品経済の浸透や交通・通信手段などの発達によると考えられる。この過程についての論究は、先述のマッキーバーの規定では、きわめてあいまいであった。なぜならば、マッキーバーによる共同生活や地域についての規定が不明瞭であったからである。

それに対して、ソローキン (P. A. Sorokin) は、人々の間の結合を説明することから、コミュニティを規定した。すなわち、その基本的な観点は、あらゆる現集団の中に存在する諸個人の社会的結合の絆にあった。そして、この絆にもとづいて、諸個人は相互依存的に生活・行動し、心理的にも一体感や連帯性・利害の共同観をもつと考えた。

さらにまた、この絆の数によって、社会集団を、「原初的集団 (elementary group)」と「累積的集団 (cumulative group)」とに大別した。前者は一つのみ結合しあい、後者は二つ以上の絆で結合しあっている。こうした規定にも

とづいて、ソローキンは、農村を、「累積的共同社会 (cumulative community)」と「機能的結社 (functional association)」⁽¹⁴⁾とに類型的大別をした。前者は累積的集団に対応し、後者は原初的集団に対応する。そして、ソローキンは、現代のアメリカ農村では、累積的共同社会が解体化しつつあると考えるのであった。

しかし、この規定において、数多くの絆として挙げられている諸要素の共同の意味内容に大きな違いが見られる。たとえば、土地の共同利用と施設の共同利用などである。それらを同一のものとして扱っている点に、問題性を指摘できると思う。

以上のように、コミュニティの概念化においては、「共同性」と「地域性」の両範疇が重要な意味をもっている。けれども、これまでの規定においては、両範疇の意味内容が充分に明らかにされているとは言えず、そのことがコミュニティ概念の規定をさらに困難にしていると考えられる。そこで、次節では、社会概念としてのコミュニティをいかにして規定できるかについて言及したいと思う。

第三節 コミュニティと共同性

先述したように、コミュニティの概念は、一般的理論としてだけでなく、実践的側面での政策的手段としての意味あいをもつものである。そして、こうしたコミュニティのもつ両

面は、現実において、互いに何らかの影響を及ぼしあつてい
ると考えられる。このことは、コミュニティの多義性とともに
に、概念規定をさらに困難にしている。したがって、社会学
的アプローチによつて、コミュニティの意味内容をさらに明
確にしておく必要があると言える。本節では、これまでのコ
ミュニティ論の展開を考慮しながら、コミュニティの今日的
な規定について、社会学的検討を試みたいと思う。

コミュニティは、共同性と地域性を主要な構成要素とす
ると考えられるが、その意味内容が多義的であるがために、
明確な規定を下すことが困難であつた。しかしながら、社会
の本質を規定するものとして、コミュニティの概念を規定す
る場合、その中核をなすものは、「共同性」であると言える。
なぜならば、地域性と共同性とを独立した変数として考える
ならば、地域性は共同性実現の基盤にすぎないと規定できる
からである。⁽¹⁵⁾ この意味において、コミュニティは、共同性が
現実の実体的な特性として顕在化している地域社会を表わす
「共同体」という用語に適合すると言える。しかし、この場
合の「共同体」は、ゲマインデ (Gemeinde) としての意味
ではなく、ゲマインシャフト (Gemeinschaft) の意味を含
むものである。ゲマインデは、土地との関連の上で地域性が
強調される点で、アメリカ社会学でのコミュニティ規定と類
似しているように思われる。しかし、このゲマインデは、経

済史学の分野での専門的概念であつて、社会学での一種の地
域概念としての「共同体」と直接結びつけるのは問題である。
それに対して、ゲマインシャフトは、ゲゼルシャフト (Gesell
schaft) と対をなす社会類型概念として、テンニース (F.
Tönnies) によつて規定されたが、従来は共同所有される土
地と結びついた地域概念としての意味も含んでいた。しかし、
今日では、一般的語義として、地域性を直接に問題とせず、
社会関係の一定の特性をさすものである。

以上のような意味から、ここで厳密に言うところのコミュ
ニティとは、『共同性』を顕著に実現させているか、それを
最も助長させる程度によつて規定される地域概念である⁽¹⁶⁾と
考えられる。このように、コミュニティの本質的部分を共同
性に求める必要性は、今日の地域社会研究において、共同性
の喪失を「コミュニティの解体」として論議したり、また地
域社会でのあらたな共同性回復の実践的課題として「コミュ
ニティ形成」が掲げられ、地域的な社会組織の再編成をめざ
していることなどからうかがうことができる。

しかしながら、共同性のみを基本的な要素として強調する
観点からのコミュニティの定義は、アメリカ社会学において
はほとんど見つけることができない。そこで、ここではこの
少数派の立場にある研究の一つとして、中久郎氏が指摘され
ているニスベット (R. A. Nisbet) の理論を参考として概観

しておくことにする。⁽¹⁷⁾ところで、ニスベットについては、現代社会学の主要概念やその社会思想史的背景・意義を探究した学説史的研究が、一般的によく知られている。この一連の研究の一つである『社会学的発想の系譜 (The Sociological Tradition)』(一九六六)の著作をもとにして、中氏はコミュニティ規定の問題を検討しておられる。

それによると、ニスベットは、コミュニティが社会学の単位概念の中で、最も基本的で影響範囲の広いものであるとする。そして、このコミュニティは、十九世紀から二十世紀の思想に見られる高度の人格的な親密さ・情緒の深さ・道徳的な献身・社会的凝集・時間的継続性などの特性をもつ諸関係のあらゆる形式を含むものであつて、社会秩序の中で果たすおのおの役割によつて把握される人間にその基礎を置くと規定される。このようなコミュニティの規定の背景には、ニスベットの問題関心の中心が、コント (A. Comte) やデュルケム (E. Durkheim) に連なる道徳共同体論にあつたということを指摘できる。以上のように、中氏は、共同性を強調する立場のニスベットの理論を整理しておられる。

このような考え方は、その究極において、初期社会学での「ソキエタス (societas)」と対立的な「コムニタス (communitas)」に結びついているように思われる。ソキエタスは、ヨーロッパの中世封建制崩壊後の市民社会形成にともな

い、近代自然法論の中で明確化された観念であつて、社会学成立の重要な役割を担つた。⁽¹⁸⁾このソキエタスを語源として、ゲゼルシャフトや「社会 (société)」という社会学の重要な社会概念が成立した。それと同時に、コムニタスの観念に由来するゲマインシャフトなども、社会を意味する概念として重視されてきた。このコムニタスは、社会を諸個人の目的結合による構成と見る近代自然法論的な規定とは対立的であつて、自然的集合や人間の生の集合という意味を表わし、非合理的性格をもつものである。このようなコムニタスを起源とした社会の捉え方の一つとして、コントの「道徳的共同体」を挙げることができる。つまり、コントは、コムニタスが社会的なものであると規定し、それが同時に共同体的な意味をもつと考えたのである。

以上のように、ソキエタスとコムニタスの両観念は、社会学における社会概念の起点をなすものとして、社会の本質を規定する上で重要な意味をもっている。このことから、ニスベットによるコミュニティの規定は、その究極において、社会概念の本質の規定に迫らうとするものであると考えられる。

ところで、ニスベットによる規定に対し、マッキンバーによるコミュニティの概念化は、集合的な意味あいでの全体性を基盤とする結合を強調する点で類似性が見られる。しかし、このマッキンバーの規定は、後に地域性を重視する方向に変

わり、人間生態学的な把握に近づいていく。すなわち、共同性をもった「地域社会」として、共同生活実現のための基礎的な諸条件を重要な問題としたため、そこに実体的な意味あいも含むことになり、ニスベットの考え方とは異なってくるのである。

以上のように、共同性を本質的要素として重視するコミュニティの概念は、社会学での社会概念の規定の問題とも結びつくことによって、その意味内容をいくらか明確にしたと言える。ところで、こうした観点からコミュニティを規定した際、もう一つ問題となるのは、その「共同性」自体がもつ意味内容である。この共同性については、先述したコミュニティ論に様々な規定がなされている。このことは、それぞれの概念化の観点が異なることに起因する。したがって、ここで問題とすべき「共同性」についても、先程規定した観点にもとづいて検討する必要がある。そこで、ここでは先に参考とした中久郎氏の見解を再び概観することによって、共同性を最も重要な要素とするコミュニティ規定における「共同性」の意味内容を整理しておくことにする。⁽¹⁹⁾

それによると、「共同性」の分析的構成要素を明らかにする場合、コミュニティ概念の一義の規定との関連を考慮して、自発的層位における相互関連的な次の三つの要素を挙げるこ

とができる。それは、①共同紐帯 (common tie)、②共同感情 (common sentiment)、③共同生命あるいは共同生活 (common life) の三つである。これらの中で、③の要素は、「共同性」の本質的な意味あいを含む中核的な部分であり、他の要素をも規定するものとして、最も重要なものである。しかも、common life という一つの表現の中に、共同生命と共同生活という区別可能な意味の両方を特別に与えていることにも注意を要する、と中氏は指摘しておられる。

さらに、ここで言う「共同生命」は、共同性が生の自発的表現を自己目的として形成されることを示すが、そのことは単に生理的・生物学的諸要素を表現するものではない。こうした表現は「群集制約的」な状況において集合行動として具現化される。しかし、社会の本質にとって重要なことは、生物学的諸要素を基盤としながらも、その諸要素が共同体的経験から形成される一つの「集合的人格」として統合され、精神化されるということである。すなわち、共同生命は、人々の人格的な相互行為過程の中で、集合的なものである独自の「共同的生命」をつくり出し、その共同的生命が個人の生物学的傾向性を抑制することによって、人間を社会的存在に再規定しているのである。これとは対照的に、マッキンバーは、成員の生活の自足性 (self-sufficiency) にもとづいた「共同生活」の意味を、common life の中に規定している。す

なわち、共同の利害 (common interest) にもとづく諸個人間の自由で自発的な相互行為の中に、その意味を見出している。このような意味から、マッキンバーの概念は、生活共同体であるとして、道徳共同体と区別することができる。

また、もう一つの構成要素である「共同紐帯」は、相互関係や、関係の「他者関係」次元で把握される共同性であって、その結合が持続的で人格的であり、直接的な結合や接近の状態である時に構成要素としての意味をもつ。この要素は、「生活共同体」の規定においても見られるが、ここでは共同性が本来的に利害を追求する諸個人の非人格的関係との関連の上で概念化される。したがって、共同紐帯は、共同生活の基本的諸条件を諸個人が分有することによって形成される共同生活上の特徴であると意味される。

そして、第三の構成要素としての「共同感情」は共同性の客観的要件としての共同紐帯に対して、主観的要件あるいは主観的経験内容を表わすものであって、その中に数多くの種類の感情を含んでいる。これらの感情のすべては、群集感情 (体験) や感情移入を、その根拠や前提としながらも、このどちらかと同一であることはない。すなわち、共同感情は、この二つの対立的な類型の中間に位置するものである。そして、その内容としては、「共属感情」と「共有感情」の二つが重要である。前者は、常に個人的関係 (他者関係) におい

て、各個人が主観的 (感情的あるいは伝統的) に体験する感情である。後者は、同じ体験が「われわれ」の中に帰着することから生まれる合意にもとづく拘束的表現であるという特徴をもつ。したがって、共同感情は「他者関係」次元において、共有感情は「われわれ」次元で明確化される概念である。これらの区別は、先述した生活共同体と道徳共同体とにそれぞれ対応し、両類型の区別をさらに明らかにするものである。中久郎氏による「共同性」についての見解を要約すれば以上のようになる。

ここで注目されることとしては、コミュニティの最も主要な構成要素である共同性の規定において、人間の人格的な相互行為の中から形成される共同生命の意味を重視している点が挙げられる。すなわち、共同性は、単に諸個人の利害にもとづく非人格的な相互行為の中だけでなく、諸個人の生命を自発的に表現するために、人間の生物学的要素ではなく、人格的な側面での相互行為が行なわれる中でも、集合的なものとして形成されるという点である。この点は、道徳的共同体という用語からもある程度推察できるが、マッキンバーのコミュニティ概念の意味内容との対比の上で、さらに明らかにされていると言える。

また、こうした観点からのコミュニティ概念の規定は、先述したアメリカ社会学での実体的な意味あいよりも、はるか

に高次元化されている。それは、社会概念の根源におけるソキエタスに対立するコミュニティとの関連の上で観念されていることからもうかがえる。換言すれば、このコミュニティ概念は、社会学の最も究極的な問題である「社会」と「個人」の問題に関して、今日的な一つの規定をしようとするものである。ニスベットの行なった学説史研究や思想史研究も、こうした点をその主要な課題としたものであらうと思われる。以上のことから、社会学におけるコミュニティの概念の規定は、社会の本質に関わる重要な問題であると言うことができる。

註

- (1) R. M. MacIver & C. H. Page, *Society*, 1950, p. 12.
- (2) *Ibid.* p. 8.
- (3) 初期の著作である“*Community*” (1917) の中で、この定義がすでになされている。
- (4) R. M. MacIver & C. H. Page, *op. cit.*, 1950, p. 10.
- (5) マッキンバー自身も、コミュニティ間の境界線の輪郭が不明瞭であることを指摘し、その具体的な例として、修道院・尼僧院・刑務所・移民集団・社会的カーストなどを挙げている。
(R. M. MacIver & C. H. Page, *op. cit.*, 1950, p. 10)
- (6) 市村友雄編著、『都市と農村の社会学』、時潮社、一九六二、一八四～一八五頁。
- (7) ラーバン、コミュニティの紹介は、森岡清美、「アメリカ農村社会学におけるルーラル・コミュニティ論の展開」(村落社

会研究会編、『村落共同体の構造分析』、時潮社、一九五六、所収)、一八〇～二〇三頁、において見られる。

- (8) 同心円地帯理論とは、「大都市の物理的發展・拡大に注目し、大都市の發展がループ(loop)といわれる中央業務地区から放射状に拡大する傾向を理念的に構成」したものである(「大山信義、『地域社会の諸相』(関清秀編著、『基礎社会学』、川島書店、一九七六、所収)、一三三頁)。

- (9) 中久郎、「社会学における社会概念の構成」、『京都大学文学部研究紀要』、第一七号、一九七七、一六一頁。

- (10) 中久郎、前掲論文、一六一頁。
- (11) G. A. Hillery, Jr., “Definition of community: Areas of agreement,” *Rural Sociology*, vol. 20, No. 2, 1955 に發表された。

- (12) 新明正道、「地域社会の概念について」(蔵内博士退官頌寿記念論文集、『社会学における理論と実証』、培風館、一九六三、所収)、一二二頁。

- (13) この点は、園田恭一、「地域社会と共同社会——コミュニティ概念の再検討を中心に——」(日本社会学会編、『社会学評論』、五六、一九六四、所収)を参照せよ。

- (14) 面概念の訳語は、園田恭一、前掲論文にもとづく。

- (15) R. M. MacIver & C. H. Page, *op. cit.*, 1950, p. 9.

- (16) 中久郎、前掲論文、一六三頁。

- (17) 中久郎、前掲論文、一六五～一六六頁。

- (18) 新明正道、『社会学史概説』、岩波全書、一九五四、二四～三八頁。

- (19) 中久郎、前掲論文、一六七～一七五頁。

(大学院修士課程)